

Ⅱ ホンモロコ放流追跡調査

山根恭道

ホンモロコは宍道湖淡水化後の魚種転換対策魚として導入されたが、本年度議会において宍道湖の淡水化が凍結となり、実質的に当事業も凍結という型となった。

ホンモロコの種苗については今後未利用水域対策事業として、ダム湖や溜池等に放流を実施する予定であり本年度の宍道湖及び潟の内放流は中止した。

宍道湖及び潟の内において昭和56年度から昨年度まで、毎年20～30万尾の種苗を放流し調査を実施して来たが、生残率は低く再生産もしていない様であり増加傾向は見られない。原因としては、宍道湖は塩分があり生息及び再生産に適さないためであり、潟の内においては農業用水の溜池及び排水池として利用されており底質はヘドロ化しているため、水質環境が悪いためではないかと思われる。また潟の内は農業用水が不用となる10月末頃より水門を開放し、宍道湖と日本海を結ぶ佐陀川へ湖水を放水するため、放流された種苗の大部分が少しでも生息環境の良い場所を求めて、宍道湖へ免散していたと考えられる。これは昨年放流直後に放流サイズのホンモロコが、浜佐陀の佐陀川入口付近にある柵網に平均20尾程度入網していたことが、本年聞き取りした結果わかった。また斐伊川河口と船川におけるワカサギ生息調査でも、近年放流したものと思われるホンモロコが採捕される事からもうなずける。

したがって宍道湖及び潟の内における、種苗放流増殖試験の結果は不十分ではあるが不適であるとしか言い様がなく、不十分な点は未利用水域増殖対策事業の方で明らかにしていく必要がある。